様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７２０１２５
研究課題名（和文）　北宋中期における文人ネットワークと酬唱詩の研究
研究課題名（英文）　Literati Networks and *Chouchangshi* (Responsory Poetry) in the Mid-Northern Song Dynasty
研究代表者
緑川　英樹（MIDORIKAWA　HIDEKI）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：３０３８２２４５

研究成果の概要（和文）：
本研究は、北宋中期における欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽らの文人ネットワークの実態を分析し、彼らの創作活動が＜宋詩＞的スタイルの形成に重要な役割を果たしたことを明らかにした。具体的には、以下の二点について考察した。(1) 蘇舜元・蘇舜欽兄弟による一連の聯句作品は、聯句から次韻（依韻）へと酬唱様式が変化してゆく過程において、中唐の韓孟聯句の奇怪な風格を継承しようとする最後の意欲的な試みであった。(2) 夷陵時期の欧陽脩の作品には、左遷された境遇のなかで悲哀に耽溺するのではなく、むしろ当地の風土習俗に関心を向け、韓愈の文学に同化しようとする傾向が見える。その点は、彼が中央政界に復帰した後の作品、「山を憶いて聖俞に示す」詩において明確に表現されている。

研究成果の概要（英文）：
My research has sought to analyze the nature of networks established by Mid-Northern Song literati such as Ouyang Xiu, Mei Yaochen and Su Shunqin and elucidate the important role these networks and their constituents played in shaping the style of Song Poetry. Specifically, I have investigated (1) how the brothers Su(Su Shunyuan and Su Shunqin) ambitiously attempted to further develop the unconventional style of Han Yu and Meng Jiao of the Mid-Tang Period in their works as their responsory poetry style changed from *lianju*(linked poetry) to *ciyun* (responsory poetry with rhyme) and (2) how Ouyang Xiu's works show that, following his punitive exile to Yiling, rather than dwell on his misfortune, he instead focused his energies on local customs and culture, attempting to integrate his style with the literature of Han Yu. This is clearly reflected in Ouyang's *Yishan shi Shengyu* ("Reminiscing on the Mountains and Showing this poem to Shengyu"), a work which was written after he returned from exile to work in the central government.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：宋詩、欧陽脩、梅堯臣、蘇舜欽、聯句

１．研究開始当初の背景

北宋の中期、第四代皇帝仁宗の治世（在位1022～1063）に、欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽らが詩文変革に主導的な役割を果たしたことはよく知られており、従来、個別的な作家・作品研究が少なからず蓄積されてきた。近年、中国大陸・台湾において、彼らを「文人集団」「詩派」として包括的に把握しようとする研究が徐々に現れ始めている。程杰『北宋詩文革新研究』（内蒙古教育出版社、2000 年）、黄美鈴『欧・梅・蘇與宋詩的形成』（文津出版社、1998 年）、呉大順『欧梅唱和与欧梅詩派研究』（陝西人民出版社、2008 年）、王水照「北宋洛陽文人集団的構成」「嘉祐二年貢挙事件的文学史意義」ほか一連の論考がその代表である。また英語圏の注目すべき学術成果として、Colin S.C.Hawes, *The Social Circulation of Poetry in the Mid-Northern Song*（State University of New York Press,2005）がある。いずれもすぐれた労作であり、今後の研究の方向に重要な指針を与えるものではあるが、「文人集団」「詩派」内部の交遊関係の解明、酬唱活動の実態に即した作品分析、詩学意識の考察という点では、さらなる深化が求められる。

一方、日本の学界においては、小林義廣『欧陽脩　その生涯と宗族』（創文社、2000 年）、東英寿『欧陽脩古文研究』（汲古書院、2003 年）などの卓越した成果が公刊されたものの、前者は欧陽脩を宗族という視角から考察した歴史学の論考、後者は科挙制度や政治運動にもとづいて古文復興の問題を論じた散文研究が主であり、ともに欧陽脩の詩と詩学に直接論及することは少ない。梅堯臣・蘇舜欽の文学に関しても、筧文生氏による先駆的な研究を除けば、綜合的な分析はいまだ不十分であると言わざるをえない。

本研究代表者（緑川）は、北宋中期の詩人のうち、主として梅堯臣に焦点をあて、その創作実践と詩学理論を考察してきた。「文字之楽――梅堯臣晩年の唱和活動と『楽』の共同体」（『中国文学報』第 65 冊、2002 年）では、晩年の梅堯臣と欧陽脩の唱和詩に実験的な技法が多用されていることを分析したうえで、彼らの旺盛な唱和活動が＜文学のたのしみ＞という観念に支えられていたことを明らかにした。しかし拙論の考察対象は、欧陽脩・梅堯臣晩年の唱和詩にほぼ限定されており、他の士大夫との交遊や酬唱の状況、後世の読者の受容といった点については充分に論じ得なかった。そこで、あらためて当時の士大夫の出身階層・地域の差、学問上の師承や姻戚関係、先行文学に対する受容状況などを視野に入れながら、欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽らによる文人ネットワーク全体の実態を解明する必要があると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、北宋中期、とりわけ仁宗朝における欧陽脩を盟主とした文人ネットワークの実態を分析したうえで、彼らの酬唱詩を含めた創作活動が＜宋詩＞的なスタイルの形成、あるいは後世の読者の宋詩に対する認識にどのように作用したのかを明らかにすることにある。

（１）酬唱詩を通した北宋文人ネットワークの実態

現存する梅堯臣の詩二千八百余首のうち、酬唱詩（唱和・贈答・聯句）は約四分の一を占め、彼の文学活動、特に欧陽脩との関わりを考えるうえで看過できない。実際、北宋中期において大量に制作された酬唱詩、および書簡・筆記などの史料は、文人同士の詩の交換や流通のありかたを如実に示すものであり、どのような場で唱和がおこなわれ、いかなる詩学意識のもとに先行作品が受容されたのかを解明する手がかりとなるだろう。そのことと関連して、中唐期に流行した聯句という酬唱様式がなぜ宋代になって衰退したのか、という問題も検討に値しよう。

（２）後世の評論家・読者による北宋中期の詩の受容

上述した酬唱詩による文人ネットワークの解明がいわば共時的な視点であるとするならば、他方で後世の評論家・読者たちがどのように北宋中期の文人とその創作活動を受容したか、という通時的な視点もありうるだろう。かつて拙稿「方回の梅堯臣評価について」（『神戸外大論叢』第 57 巻第 1～5 号合併号、2006 年）では、宋末元初の律詩選本『瀛奎律髄』の考察を通して、その一端を示したことがあるが、本研究においては、後代の評論家や選本において、北宋中期の文学がどのように位置づけられていたのかを解明する。

３．研究の方法

（１）研究文献目録と仁宗朝酬唱詩データベース」の作成

先ず基礎作業として、欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽をはじめとする北宋中期、仁宗朝の詩人について、先行研究を網羅する文献目録を作成する。また彼らの酬唱作品（唱和・贈答・聯句）の整理、集成、および交遊関係などの考証をおこなう。

（２）蘇舜元・蘇舜欽兄弟の聯句解読
北宋中期になると、聯句創作が下火になってゆき、依韻あるいは次韻に取って代わられてゆく。まとまった数の聯句作品をのこすのは、せいぜい蘇舜元・蘇舜欽兄弟ぐらいになる。そこには、単なる遊戯性や競争性にとどまらない、独特の創作心理が存在すると考えられる。そこで、蘇氏兄弟の手になる八首の聯句について、詳密な訳注を作成しながら解読を進め、同時に、従来書家として知られることの多かった蘇舜元の伝記事項を整理する。もちろん、個別の作品分析や伝記考証にとどまらず、酬唱詩制作の背後にある作り手の出身階層・地域の差、学問上の師承や党派・姻戚関係というネットワークとしての要素も視野に入れるべきであろう。

（３）宋代中期における唐詩受容の考察
欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽らの創作活動がいわゆる＜宋詩＞的なスタイルの形成にどのような役割を果たしたのか、先行文学である唐詩、ことに韓愈受容の状況とどのような関わりがあるのかについて解明する。具体的には、欧陽脩の夷陵左遷時期を中心として、同じく何度も左遷の身にあった韓愈の嶺南体験と比較しながら、境遇に対する態度、非＝中原の地に対するまなざしを中心に分析する。

（４）後代の宋詩選本の文献調査
国内外に所蔵されている清代の宋詩選本のうち重要なもの、および朝鮮王朝で編まれ、伝存の少ない梅堯臣詩選本について調査し、その選詩基準や宋詩史観、欧・梅・蘇の酬唱詩に対する評価を検討する。欧陽脩・梅堯臣の詩については、旧来、注釈がきわめて少なく、こうした文献調査は、彼らの作品解読それ自体にも大いに資するものである。

４．研究成果
（１）梅堯臣・蘇舜欽研究論著目録、仁宗朝酬唱詩データベース
本研究の基礎的作業の成果として、梅堯臣と蘇舜欽に関連する研究論著目録を刊行した（〔雑誌論文〕③）。各種文献目録や国立情報学研究所 CiNii Articles、中国学術文献オンラインサービス CNKI などを用いて遺漏がないよう努めたうえで、可能な限り現物を実見、入手し、書誌情報の精度を高めた。なお、欧陽脩については、東英寿「欧陽脩研究論著目録（1945～1986）」（『中国文学論集』第 16 号、1987 年）「欧陽脩研究論著目録稿-2-（1987～1996）」（『中国文学論集』第 27 号、1998 年）がすでに公表されているので省略した。

また北宋中期、仁宗朝における酬唱作品（唱和・贈答・聯句）の実態を綜合的に調査するために、データベースの作成をおこなうことを計画していたが、現存する作品が厖大な量におよぶため、欧陽脩・梅堯臣・蘇舜欽に関わるものに限定して入力作業をおこなった。これによって、原作詩と酬唱詩の関係、詩体の区分、句数、制作時期、交遊関係などが一覧可能になった。このデータをどのような形で公表するかは目下検討中である。

（２）蘇舜元・蘇舜欽兄弟の聯句と北宋中期における酬唱様式の展開
従来ほとんど未開拓であった蘇舜欽およびその兄の蘇舜元による「地動聯句」「悲二子聯句」「送梁子熙聯句」「丙子仲冬紫閣寺聯句」「薦福塔聯句」「水輪聯句」「瓦亭聯句」「淮上喜雨聯句」に対して詳密な注釈を施し、楊重華『蘇舜欽詩詮注』（重慶出版社、1988 年）、傅平驤、胡問濤『蘇舜欽集編年校注』（巴蜀書社、1991 年）など旧注の不備をいささか補った。
蘇氏兄弟の一連の聯句作品は、聯句から唱和詩（次韻あるいは依韻）へと酬唱様式が変化してゆく過程において、中唐の韓孟聯句の奇怪な風格を継承しようとする意欲的な試みであったことを指摘した。また語彙・句法・イメージの面においては、梅堯臣・謝景初「冬夕會飲聯句」と同様、韓孟聯句の「城南聯句」に倣う部分が多いけれども、「瓦亭聯句」「淮上喜雨聯句」など、特に蘇氏兄弟の後期の聯句になると、むしろ戦時を詠じた「征蜀聯句」に範を取りつつ、対西夏戦争の実態に即したより写実的な描写がなされたり、農民の困窮を哀れむ社会的な視点が提示されるようになる。この点は、蘇舜欽の他の辺塞詩や社会詩と軌を一にするものであり、単に遊戯的に韓孟聯句に模擬したのではないと言えよう。
なお、聯句という様式の研究に関連して、和漢聯句の訳注を分担執筆した（〔図書〕②）。

（３）夷陵時期の欧陽脩における韓愈受容
欧陽脩が先行文学である唐詩、ことに韓愈をどのように受容したかについて、夷陵県令在任期を中心に考察した。この時期の欧陽脩の作品には、左遷された境遇のなかでいたずらに悲哀に耽溺するのではなく、「夷陵縣至喜堂記」や「夷陵九詠」と称される連作に見えるごとく、むしろ当地の風土習俗に積極的に関心を向け、韓愈の文学に同化しようとする傾向が見える。慶暦元年（1041）、欧陽脩が中央政界に復帰した後の作品、「憶山示聖俞（山を憶いて聖俞に示す）」詩では、韓愈の五言古詩の長篇大作「南山詩」と同一の去声宥韻の一韻到底格を用い、同じように度重なる左遷体験を持つ韓

愈の文学を追体験しながらも、より楽天的、理智的な態度によって悲哀への没入を避けようとしている。要するに、欧陽脩にとってこの作品は夷陵時期の文学的総括と称すべきものである。

なお、附随する成果として、韓愈詩の訳注作業にも携わるとともに、「韓愈集版本・注釈概説」を執筆した（〔図書〕③）。甚だ限定的ではあるが、欧陽脩ら宋代文人における韓愈詩受容のありかたにも少しく論及した。

（４）後代の宋詩選本の文献調査

上記（１）～（３）と比べ、この点に関しては書誌学的データの収集・整理にとどまっており、必ずしも全面的かつ詳細な考察にまでは至らなかった。三年間の研究期間を通して、調査できた宋詩選本は以下の六点のみである。

『宋詩善鳴集』二巻、清・陸次雲 選、康熙二十六年蓉江懐古堂刊本

『宋詩啜醨集』四巻、清・潘問奇・祖応世選輯、乾隆十八年刊本

『宋十五家詩選』十六巻、清・陳訏 輯、続修四庫全書本、江戸文政十年昌平黌刊本

『積書巌宋詩刪』二十五巻、清・顧貞観 輯、康熙三十五年宝翰楼刊本

『宋詩略』十八巻、清・汪景龍・姚壎 輯、乾隆三十五年竹雨山房刊本

『宛陵梅先生詩選』二巻、朝鮮・安平大君李瑢 編、世宗二十八年全羅道錦山郡刊本

このうち、『宋詩啜醨集』四巻については上海図書館古籍部の許可を得てデジタルカメラによる撮影をおこない、特に巻一に収録する梅堯臣七首と欧陽脩十一首に対する評論を仔細に検討した。銭鍾書『談藝録』第五〇条「賀黄公以下論宛陵詩」がつとに指摘するように、潘問奇と祖応世は梅堯臣詩の缺点に対して痛烈な批判を述べる一方、欧陽脩については、「僕於南北兩宋詩、古推歐・蘇（僕は南北両宋詩に於いて、古は欧・蘇を推す）」と述べ、その古詩の章法の巧みさを大いに称賛する。

本研究期間中に、謝海林「《宋詩啜醨集》考論」（『清代文学研究集刊』第二輯、人民文学出版社、2009 年、『中国韻文学刊』2009 年第 2 期）が発表され、その後、当該論文を収録した謝氏の専著『清代宋詩選本研究』、上海古籍出版社、2011 年）も上梓された。本研究の調査結果と重複する部分があることは否めないが、今後、評語をさらに緻密に分析し、他の宋詩選本とも比較することによって、あらためて『宋詩啜醨集』の宋詩史観を探ってゆきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 緑川英樹、大平幸代（訳注）、『莫砺鋒詩話』「秋」「佳節」、飈風、46、2009、pp. 55-80、査読無

② 緑川英樹、大平幸代（訳注）、『莫砺鋒詩話』「中秋」「除夜」、飈風、50、2012、pp. 39-56、査読無

③ 緑川英樹、梅堯臣・蘇舜欽研究論著目録、橄欖、19、2012、掲載確定、査読無

〔図書〕（計３件）

① 京都大学国文学研究室・中国文学研究室（編）、緑川英樹（分担執筆）、看聞日記紙背　和漢聯句譯注、臨川書店、2011、pp. 196-211（漢句、総ページ数 249）

② 長田夏樹先生追悼集刊行会（編）、緑川英樹（分担執筆）、長田夏樹先生追悼集、好文出版、2011、pp. 143-144、156-159（総ページ数 486）

③ 川合康三、緑川英樹（編）、韓愈詩訳注、第一冊、研文出版、2012、印刷中

６．研究組織

(1)研究代表者

緑川　英樹（MIDORIKAWA HIDEKI）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：30382245

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし